
龍神の花嫁探し

宮澤みずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍神の花嫁探し

【Nコード】

N2161B

【作者名】

宮澤みずき

【あらすじ】

ある事件がきっかけで妻を失い、1000年以上引きこもっていた湖の主に、従者である蛟は新たな花嫁候補を探させようとするが・・。

第1話　ねぼすけの主

こぼこぼこぼこぼ・・・。

心地よい水の音と慣れ親しんだ感触に浸りながら、「彼」はそつと目を開けた。

日の光が僅かに差し込む湖の水底で、水草はゆらゆらと身を任せている。「彼」が体を起こすと、「彼」の凄烈な気が湖一杯に広がっていく。目覚めたばかりの「彼」の恩恵を得ようと、岩陰の傍に「彼」の眷属達が次々と群がってきていた。

「彼」は湖の主。はるか昔から、この湖に住まうものを守ってきた。

「彼」が平和で退屈な高天原から、この湖の底に移り住んだのはずいぶん前のことだ。人間とは比較にならない長い時を生きていた「彼」でさえ、高天原にいたころの記憶は曖昧で霞がかっている。

神代のころから、「彼」が起きているときはもちろん、深く長い眠りに就いている時でさえ彼の清浄な気がこの湖を守ってきた。一度だけ、ある人間の怨嗟でこの湖が壊滅的な穢れを負ってしまったことがあったが・・・。

「我が主よ。」

抑揚のないこの声の主は、蛇体に四肢を有し、細い角と血の様に赤い髭をそよがせ、その背は青い斑点があり、体は錦のような輝きを持っていた。そして、腰から下は全て逆鱗となっており、長い尾の先には大きな瘤がある。「彼」と似て「彼」ではない者。

「蛟か。久しいな。」

「お目覚めになられましたか。あなたが眠りについて、約1000年。少しは心を慰められましたか？」

「うむ……。」

「彼」は少し苦い笑いを返した。「彼」が眠りに就くきっかけとなった事件を思い出すと、未だに胸が締め付けられる思いだった。「彼」が引きこもる原因―恋焦がれて強引に手に入れた妻を手放さなければならなかったこと―が「彼」の中で重くのしかかっている。

「寝ぼすけのあなたが、あれだけ寝てもダメなのですか。こうなったら……。」

かっ　と蛟の目が光り、手を「彼」にかざした。

この蛟の様子に慌てた「彼」は咄嗟に身構えた。蛟は、「彼」と違って長い時を眠らずに過ごしてきた。ある時は人の子として生きていたことがあり、術を使うことを得意としている。

「蛟。そなた、何をするつもりだ？」

蛟の手から、だんだんと強い光が発せられていく。目覚めたばかりの「彼」は、結界で身を守ることも出来ずにたじろぎながら「彼の眷属に問う。

「失恋に効く薬は、新しい恋だとあなたの愛妾がおっしゃってました。奇しくも、あなたに合う極上の器が上にございます。」

「何・・・？」

「我が主よ、人の一生など我等にとつてはまたたきの間のもの。少しだけ、息抜きをしていらっしやい。」

主に向かってなんて言い草だ　と文句も言う間もなく、「彼」の体は光に飲み込まれた。

最後の光の余韻が消え、蛟はため息をついた。

「今度こそ、あなたに相応しい花嫁を見つけてくださいね・・・。
蒼龍様。」

「はあああああ！」

年頃の女性らしくない雄たけびで、天野海月はベットから飛び起きた。なんてことだ、今日は数学のテストがあるのに。こんなときにこんなときに・・・。

長い黒髪を梳きながら、海月は先ほどの夢を思い出す。

蛟によって、人間の体に魂を飛ばされた哀れな湖の主。期限は人の一生分。

その哀れな湖の主、蒼龍。

・・・わたしだ！

自覚してしまった瞬間、走馬灯のように駆け抜ける膨大な記憶。確信にかわり、海月は脱力し頭を抱えた。

おのれ、蛟よ。

花嫁というならば、何故人間の女の体に私を宿らせた。

第2話 龍の少女

人気のない湖の前で、少女は水面を睨んでいた。

自らの前世を思い出した後、少女は動転しながらいつもの学生生活を送った。

彼女が懸念していた数学のテストの出来は・・・言わずもがなであろう。サイン、コサイン、タンジェント。ほとんどがぶっ飛んでしまった。

テストの結果から逃避することに決めた少女は、そっと水面に手を入れた。

こぼこぼこぼ・・・

ひんやりと心地よい水の音が遥か前の記憶をより鮮やかにしていく。少女はうつとりと水の感触を楽しんだ。少女の白い手に水がからまり、懐かしい音が零れ落ちる。

昔、光がほとんど届かない暗いこの湖の水底で、「彼」は生きていた。数多の「彼」の眷属、美しい愛妾みずぢ13人と好奇心旺盛な蛟みずぢとともに。

ほんの僅かでは時あるが、妻を娶ったこともあった。冷静なはずの自分が我を忘れ、何が何でも手に入れたくて、無理やり手折った花。

無理やり・・・。

その結果、運命を歪ませてまで手に入れた妻を失い、愛すべき己の眷属を苦しめる羽目になった。

「何、哀愁を漂わせているのですか。」

黒いスーツを着た背の高い、切れ長の瞳の男が呆れた様な表情で少女の後姿を見つめながら言い放った。柔らかな腰まで届く長い髪を風に愛撫されるがままに、少女は男の方をゆっくりと振り返った。と、同時にぎよっと目をむく。

「辰貝せんせ・・・？」

黒いスーツの男しんかい辰貝たくみ拓海は、少女の通う高校で数学の教鞭を取っている人物であった。普段は切れ長の整った顔に銀色のメガネを掛けているが、今はそのメガネを外している。

今日の数学のテストの出来を忘れない少女にとっては、甘いこの男の微笑は恐怖以外何者でもなかった。無意識に少しずつ後ずさる。

男は少女の奇妙な行動に苦笑しながら、恭しく先ほどまで湖に浸っていた少女の手を取った。慌てふためく少女に極上の笑みを投げ、安心させようと言葉を発しようとした時冷たい少女の手から、ごく僅かながら清浄な波動を感じた。懐かしい、蒼龍の気配。この神気は、数多の龍神の中でも気性が穏やかな蒼龍の、穢れそのものを水の柔軟性をもって制してしまう。

優しいからこそ、いつまでも過去に縛られている主を見守るのは耐えられなかった。守るべき湖を枯らすことになっても。

「本当に麗しい姿におなりですね、我が主。」

「！！おのれ、その言い方は蛟か！？そなたのせいで・・・。」

主の悪態は盛大な水の音とともに中断された。・・・昔から、我が主は素晴らしいボケを披露してくださる。

まあ、それを見越して手を離したのですけどね。

第3話 従者の想い

ざあああああ・・・。

「くううう・・・。おのれ、蚊め^{みずち}・・・。すまきにしてやる・・・。

」

少女のほっそりした体を、暖かいシャワーの湯気が包みこんでいく。心地よい水の感触を確かめながら、少女は男に対して呪詛を呟き続けている。

少女が呪詛をはき続けている男 辰貝拓海は、蒼龍の住处である湖に落ちてびしょ濡れになった少女を自分の家のシャワー室に押し込んだ後、おかきとお茶を用意してゆったりとソファに寛いでいた。お茶を啜りながら、拓海は教え子であり己の主である美月を想った。

蒼龍の転生 天野美月は、学校ではごく普通の生徒である。真面目で友人も多く、成績も中の上くらいをキープしていた。・・・今日の数学のテストは散々だったようだ。点数を付けた後、本当に彼女の回答なのか疑ったくらいだ。きつと、突然の覚醒でそれどころではなかったのだろうか。そして美月の容姿は、流れるような長い髪と、柳のように色白である。瞳は切れ長で、女性の愛らしさというより知性を感じさせ、どこか張り詰めた美月の雰囲気は、遙か昔の主の姿を髣髴とさせた。

「いや・・・主ではない。あの少女はあの方に似ているのだ。奥方

様に。」

蒼龍が愛した最初の妻、蓮妃^{れんひ}に。

拓海は静かに目を伏せた。蓮妃を失った蒼龍は、それから二度と人形をとることはなかった。常に本性の龍神のままの姿で嘆き悲しんでいたのだ。皮肉にも彼が悲しめば悲しむ程、彼の神気は清浄で研ぎ澄まされていった。やがて悲しみに耐えられず永い眠りについてからも、主の安らいだ寝顔は見ることは叶わなかった。

シャワーの水音が止んだ。少女がもうすぐここへ来るだろう。彼は待ちきれず、部屋のドアを開け少女の来訪を待った。しばらくして、しっとり濡れた長い髪をタオルで拭きながら、白いバスローブを着た少女が大きい足音とともに彼の元まで歩いてきた。彼女の瞳にあるのは、困惑と少しの怒り。

彼は最上級の笑顔で主を迎えた。この微笑が妙齡の女性に向けられたならば、思わず頬を染めて絶句するであろう。しかし、少女は彼の笑顔が気に入らなかったらしく、ますます眉間に皺を刻んだ。

「さあ、お茶とおかきを用意してありますよ。召し上がってください。我が主よ。」

少女は観念したように、彼の後についていきソファにどかと沈んだ。彼は、少女と向かい合って座っている。

「・・・。今の私は「蒼龍」ではないぞ。それよりそなたは何故^こ地上にいるのだ？」

「あなたを地上へ送り出した後、あなたの代わりに湖を守っていました。あなたが帰り着くまでそうするつもりでしたよ。しかし、あの事件が起こったのです。」

「事件？」

「貴方の第四夫人、浮草の君が心配のあまり人間として暮らしている貴方の元へ訪ねていったのですよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「そして、案の定、彼の君は干乾びてしまつて。」

蒼龍の眷属でもある「浮草の君」の本性は、そのままの「浮草」である。蒼龍の加護がない地上で、彼女はあつという間に本性を顕し、成す術なく干乾びてしまつたのだ。

「ちゃんと、水に戻したので大丈夫でしたよ。貴方を心配していた者は他にも多くおります。その者達の暴走を食い止めるために、私が代表して地上へ来たのです。貴方の側に居られる器を探すために黒龍の力をお借りしました。」

少女は、黒龍の名を聞いた瞬間彼の右頬に平手打ちをお見舞いした。彼はじつと少女を見る。

少女は、怒りと悲しみのないまぜになった表情で搾り出すように言つた。

「そなたは……。なんてことをしたのだ。黒龍に力添えを申し出

た
と
い
う
こ
と
は
・
・
・
。何故、何故そんなことをした！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2161b/>

龍神の花嫁探し

2010年10月13日17時55分発行